

第二回「日中韓ユース・フォーラム」の成果

—相互理解のムードが著しく向上—

一昨年9月、日本で開催された「日中韓ユース・フォーラム」第二回は、中国国連協会と四川大学が共催し、日本国連協会、韓国国連協会の協力の下に、昨年9月24日から27日まで、中国四川省の省都・成都で開かれた。参加した10余名の大学生は、気候変動条約第17回締約国会議を模して議論し、採択した決議を、声明文と共に国連事務総長、気候変動条約事務局、日

中韓首脳会談事務局に送付した。またシンポジウムでは東アジアの主体的役割と将来を熱く論じた。これに先がけ、日中韓三国の国連協会長会議が丸一日開かれ、世界に開かれた三か国の協力と役割強化、共有する文化・伝統の真価、若者達の相互理解促進を論じた。第一回に続き企画・運営に尽力した功刀理事が報告。

日本国際連合協会理事 功刀達朗

国連協会長会議の恒例化

今回は特に結論や合意を導くための会合ではなかつたが、次に挙げるような興味深い意見や示唆が多くあつた。

歴史の共有と未来のために過去を忘れようと言つても無理。過去に対

い合う対話が重要。幸いにして仏教、儒教などの文化と伝統や、漢字

文化が内包する概念と理念を共有していることは、過去を率直に見るためにの対話を容易にする。「神教や

「個の発見」に基づく西洋文化と、自然への畏敬と人々との絆・共生を求める東洋の生き方を調和・融合することは、グローバル社会にとってますます重要なことである。

主導型行動と現実主義的未来志向が、早期解決を促進する時代なのかかもしれない。次世代を担う青年達がアイディアと勇気を持って国境を超えて、政府間交渉を動かせばよい。資質や個性の相違があるからこそパートナーシップから得られる相乗効果はより大きくなる。

政府間同士で解決するのが困難な問題は、もつと青年の交流とダイア

ログにゆだねる方がよい。今や理念を知り、地球社会の公共益を志向す



国連協会長会議

るのに有用だ。議事手続きをゲームのように楽しむ学生も多いかもしないが、実質問題の方が遙かに重要。われわれ三か国の大学生に強く望まれることは、シンポジウムでお互いの意見や立場をまず理解し合うことではないか。ユース・フォーラムの二つのプログラム—模擬国連とシンポジウム—への時間配分は同等にした方がよい。第一回ユース・フォーラムで行ったように、模擬国連で採択した決議文を国連会議の本番と事務総長に、青年の意見を反映するものとして提出することは有意義。青年の責任ある参加の一方方法である。

この会合は、国連と世界が抱える重要課題について三か国が共同して、世界の議論を主導するようなニアシアチブを模索するまでには至らなかつたが、そのような具体的な協力の可能性をNGOとしての国連協会が協議するためにも、ユース・フォーラムの直前に毎年開くことが合意された。

なぜ成都で開かれたか

開催地を中心から遠く離れた四川省の成都にする旨をホスト側から聞いた時、日本側は即座に懸念を先方に伝えた。成都と重慶は2010年秋の尖閣諸島事件の時に反日デモが繰り返されたところであつたし、地方では何かと不便なことが生ずるおそれもあつた。国連協会副会长張小安女史は「デモなどが心配なら手を打つておくから問題ない（“We will take care of it”）」と答え、四川大学が是非とも共催したいと申し出たので決めたとのことであった。また有史以前から中国北西部の首都として遺跡も多く、仏教・道教の伝統もあり、それに大熊猫（ジャイアントパンダ）の繁育研究基地に学生達を案内できるとの宣伝であった。あとに聞いたことだが、余りにも多くの行事を北京と沿海都市で行うので、地方の大都市からの苦情が募つてているという政治的事情もあったようだ。

結果的には、成都開催は大変良かったことがすぐ分かった。地方の五大都市の一つ（人口1400万）である成都の住民は温かい人情味のある人達で、四川大学の歓迎ぶりもはんぱではなかつた。中国人学生参加者60名の三分の一にあたる20名と事務局・ボランティア学生約20名が四川省の大学生で、中央とちがつて言論統制もゆるいせいか、率直に意見を述べ合う闊達な雰囲気にあふれていた。この温かいオープンな雰囲気に歓迎され、日中韓の学生達は即座に友好かつ有効な知的交流の渦に溶け込んでしまつた。

ユース・フォーラム開会式

24日の開会式は、陳健中国国連協会長の力のこもったスピーチで始まり、明石康日本国連協会副会長、宣暉英韓国国連協会CEO・副会長、

功刀達朗（くぬぎ・たつろう）氏 1934年生まれ。東京大学中退、米コロンビア大学博士号取得。国連本部法務官、中東PKO上級法律顧問、在ジュネーブ代表部公使、フランクフルト総領事、国連事務次長補（カンボジア人道援助・国連人口基金担当）を歴任。国際基督教大学教授を経て、国連大学高等研究所客員教授。

朴銖吉国連協会世界連盟会長、四川大学副学長、学生事務局長がこれに続いて挨拶を行った。

陳会長は、模擬国連では、グローバルな視点から、気候変動という重大問題への理解を深め、「説得力と妥協」という平和と共生に欠かせないリーダーシップの資質を、実践を通じ涵養してもらいたい。また、日本韓三国は貿易、金融、東アジアの安定と安全に利害を共有しているが、人口と経済力のウエイトに見合つた。青年達はこれを挑戦と受け止めた。

役割を、グローバル・ガバナンスの政策形成と決定に果たしてこなかつた。「青年達はこれを挑戦と受け止めた。

成都の模擬COP17では、全体会合の後、二つの委員会に次のように討議事項を分け、それぞれ決議案作成を行うこととした。

第1委 温暖化被害への適応／ファイナンス／技術移転／能力強化 第2委 温暖化ガス排出削減

実際のCOPでは、国際環境利益優先連合（メキシコ、韓国とスイスを含む環境保全グループ、EU、条約事務局、UNEP、環境NGOs）と国家利益優先連合（途上国G77／中国、OPEC、海面上昇で存続困難となる小島嶼国グループ、アメリ



ユース・フォーラム開会式

め、国連と東アジアのパートナー・シップに、大きな役割を担う方途を皆で開発してもらいたい」と述べた。

「政策連合」が交渉のアクターとして会議の方向を左右している。

模擬「温暖化防止」交渉（第17回締約国会議—COP17）

世界各地で頻発する異常気象が、人間活動に起因する地球温暖化と因果関係にあることが、科学的に殆ど実証されている今日でも、温暖化のもたらす破局的状況へのグローバルな対処は、最も困難な国連交渉の一つとなっている。

成都の模擬COP17では、全体会合の後、二つの委員会に次のように討議事項を分け、それぞれ決議案作成を行うこととした。

第1委 温暖化被害への適応／ファイナンス／技術移転／能力強化 第2委 温暖化ガス排出削減

実際のCOPでは、国際環境利益優先連合（メキシコ、韓国とスイスを含む環境保全グループ、EU、条約事務局、UNEP、環境NGOs）と国家利益優先連合（途上国G77／中国、OPEC、海面上昇で存続困難となる小島嶼国グループ、アメリカ、インドの提案とアメリカ、ドイ

カ、カナダ、ロシア、日本などのアントブレラ・グループ）など約10の

「政策連合」が交渉のアクターとして会議の方向を左右している。

成都の模擬COP17ではこれらの交渉アクターを認めなかつたので、

各自は国の代表として発言せざるを得なかつた。その結果、単純な南北対立の構造にしたがつて、二つの委員会にそれぞれ二つの決議案が提出された。単純化された交渉は現実とかけ離れ、利害対立点を明確に理解するのを妨げ、グローバル社会の利益を「説得力と妥協」により求める作業が殆ど行われなかつたのは残念である。（COPの特殊性に鑑み、主要な「政策連合」の発言を認めることと、中国、アメリカに次いで第三のCO₂排出国であるロシアを参加国リストに加えることを、準備段階で日本側から示唆したが、ホスト側はCOP17に出席する中国代表団と相談して既に決めたことだとの返信であった。）

二日間の交渉会議の結果、第1委



では、先進国から提供される資金が、受取側の汚職や腐敗により本当にそれを必要とする人々やコミュニティに届いているかを監視するメカニズムを基金理事会に持たせ、その一方で先進国からの資金はこの基金に提供されなければ先進国のコミットメント履行とは認められないとしている。これは合体した決議が途上国と先進国双方の要求を入れたからである。技術移転などについても妥協の結果が見られる。

なお、決議採択に寄与したのはドイツ代表兼第1委の議長松嶋徹郎（東京大学）とシンガポール代表川嶋菜々美（立命館大学）の2人であつたとの定評であった。松嶋はCOP17の問題点をよく了知し、妥協の機会に敏であった。川嶋は強化合宿のためのCOP17バックグラウンド資料を専門家のガイダンスの下に作成したので、決議案を起草・修正

が、能力に応分の義務をすべての締約国が受け入れることを求める先進工業国案は対立したまま、一本の決議案に合体することはできなかつた。これは煩瑣な変則的議事手続による時間が不足してしまったことが直接の原因といえるが、元来この対立の解消は2007年にバリ島で開かれたCOP13以来の最大懸案であり極めて困難なものであった。

（因みに、その後ダーバンで11月28日～12月11日に開かれたCOP17の本番では、形の上では削減義務の継続に向けて交渉プロセスが合意されたかに見えるが、2013年以降日本、ロシア、カナダは義務から逃れ、中国、インドなどの新興国は実質的な削減義務を負わず、またアメリカは議定書発効以前から脱退しているのでその義務はない状況において、

ツ、日本の提案を一部修正し合体した決議がまとめられた。第1委に付託された四つの問題に加え、若者達が重視する「教育」が追加されたことは興味深い。ファイナンスについては、先進国から提供される資金が、受取側の汚職や腐敗により本当にそれを必要とする人々やコミュニ

したりする作業が早く、説得力にも富んでいた。

一方第2委では、排出量削減に関する京都議定書によつて先進工業国に課された削減義務を2012年以後も継続することを求める途上国案

事実上は無意味な削減策となつた。この結果「産業革命以前からの世界の気温上昇を摂氏2度未満に抑える」という目標はまず困難となつた。）

模擬COP17の決議文に添付された「声明文」



決議採択を喜ぶ川嶋（中央）と松嶋（右端）

24日夜に、参加者全員の共同声明を決議文に添付することについて予備協議が開かれ、翌25日昼食時に日本韓の代表それぞれ2名が集まり、中国の学生事務局幹部のうち第1、第2委の担当者鄧逐原が作成した草案を基に起草が行われ、合意された声明文は全体会議で満場一致で採択

された。声明文の骨子は次の通り。

第2回日中韓ユース・フォーラムに参集した大学生全員は、気候

変動のもたらした被害と将来の脅威を深く懸念する。われわれは2

012年以降の長期的協力システムが喫緊の課題であり、グローバルな視点から地域的にも確立されるべきであると考える。

「青年の創造力、理想と勇気こ

そが持続可能な開発のためのグローバル・パートナーシップに必須である」とする1992年のリオ宣言第21原則に鼓舞され、われわれは来るCOP17で日中韓三国が主導的役割を果たすことを強く期待する。われわれは持続可能な開発についての共通の認識を市民、殊に青年の間に確立するためには教育が最も重要であると考える。

地球市民としての責務を認識し、われわれ三国の青年はCOP17において合意される気候変動対策に何なりと協力する決意を表明する。

決議文と添付された声明文は、次の方々に送付された。

国連事務総長、経済社会問題担当事務次長、気候変動枠組条約事務局長、日中韓三国首脳会談事務局長。

シンポジウム「グローバル・ガバナンスにおける東アジアの役割」

参加学生90名は15名ずつ六つのグループに分かれ、次の四つのトピックについて自由に討論することとなつた。

1 東アジアの政治と安全の諸問題

2 経済と金融問題についての協力と持続可能な開発

3 東アジアの文化遺産と伝統的倫理の共有

4 グローバル・ガバナンスと東アジア地域のガバナンスに果す青年の役割

司会者の手腕によつて殆ど全員から意見を引き出し、次々と四つのトピックを処理したグループと、一つのトピックに集中し過ぎて二つほど残して終了したグループもあった。

いずれにせよ全員が発言の機会を伺も与えられ、「これほど自分の意見を十数名もいるグループの中で話

国援助推進。



シンポジウムの光景

・開発と環境悪化防止への対途上



・世界の経済と技術開発への東アジアの役割を明確化。

・東アジアの勤勉、家族の絆、儒教の伝統を再確認し世界に広める。

・日中韓青年の共同声明を、今後も重要な国連会議に提出。

これらのアイディアを日中韓三国の青年の間で十分話し合い、青年として実現可能なものから行動に移すために、「東アジア青年同盟」を設立しようという提案が三つのグループから提出された。最新のコミュニケーション技術をフルに使い、知的交流振興財団、大学を含む教育機関、自治体連合などにも働き掛け、日中韓ユース・フォーラムのアラムナイを母体として、出来るところから始めようという提案である。

ソーシャル・イベント

中国人学生の案内で訪れた独特な雰囲気の金沙歴史博物館と、目の前で何十頭ものパンダの子ども達がじやれあつたり、木の枝にまたがつて眠つたりする「繁育研究センター」では、学生達は時の経つのを

忘れるほどぜいたくな気分を味わつたようだ。

しかし、学生達が最も熱狂したの

はソーシャル・イベントの夕べであつた。シンポジウムのグループの仲間で作った即興的寸劇には、三国の習慣や言葉から生まれる誤解やユーモアあふれる風刺があつた。日中韓の伝統的歌と踊りに加え、AK B48、KARAなどの最先端のポップ・ミュージックとダンスで見事なタレントを競い合つたのは印象的であった。また、中国の詩「友情は永遠」を三か国語と英語で全員が朗読したグループもあつた。

ユース・フォーラムを振り返って

15名の日本人学生の殆どは韓国に行つたことがあり、韓国人の友人がいる。しかし、中国に行つたことのある学生は少なく、2名の中国人生と3人で模擬国連の代表となり、ルームメイトも中国人という体験は大変稀で貴重なものとなつた。日中橋大)にとつて印象的であったのは、多くの中国、韓国の学生達が謙虚にお互いの意見を聴き議論し、過去の歴史に目を置きつつも、未来志向で良好な関係をいかに構築していくのかを真摯に考えていることであつた。同様に未来に向き合おうとする仲間が多いという印象を受けた日本人学生は他にも数名いた。

気候変動会議についての複雑な経緯と対立構造についてよく勉強して、第一回ユース・フォーラムにも参加した長川美里(上智大学)と川嶋菜々美にとつても、前に果せなかつたことが出来たと喜んでいる。歴史のわだかまりのために、中国と韓国の学生に聞きたかったことを聞けず後悔していたが、それが今回出来たのは長川にとつて大きな感動だつたようだ。川嶋は「出会つた学生達が全員仲間だと思え」、初めて「東アジア人としての自分」を考えるきっかけとなつたという。伊東和貴(一

成都で日中関係につき友好的な態度で率直に話し合えたことは素直にうれしかつたという。

第一回ユース・フォーラム

で率直に話し合えたことは素直にうれしかつたという。

成都で日中関係につき友好的な態度で率直に話し合えたことは素直にうれしかつたという。

人として信頼されるようになったことを嬉しく感じていた。同時に、自分達が持っていた中国人、韓国人に対するステレオタイプが大きく変容し、隣国に極めて多くの新しい友達が出来たように感じている様子が見て取れた。と同時に「お互いの国の人々や文化は好きだが、政府は嫌い」と考える人が成都に集まつた学生達にも多いことが気になりだし、今後の課題と受け止める学生達もいた。

今回三か国学生達の相互理解へのムードが著しく向上した背景には三つの理由があつたようと思われる。

第一に、成都の温かい人情と四川大

学の気配りと歓迎ぶり。第二に、シンポジウムでは十数名のグループに分かれ、お互いに顔とジエスチャーを見ながら全員が討論に参加したこと。第三に、四川大学生10名が、鄧逐原編集長の下、ユーモアあふれるインタビュー記事と写真を入れた4頁の「ユース・フォーラム新聞」を1号から4号まで毎朝配つたこと。

第二、第三のイノベーションは今後も続けられることを期待したい。

おわりに

今回も模擬国連代表の金子健太（一橋大学）、準備事務局長・日本代表団長北條早紀（明治大学）、その他リーダー達の熱心かつ能率的な協力に負うところ大であった。学生参加者選抜にご協力いただいた国連協会の伊勢桃代、久山純弘、星野俊也三理事と、強化合宿の際に講義とブリーフィングをいただいた早稲田大学太田宏教授と、外務省の日中韓首脳会談担当官、COP17担当官の方々に深くお礼を申し上げる。また国際交流基金の資金提供に感謝申し上げる。

なお、第三回ユース・フォーラムは今年9月半ばにソウル郊外の慶熙大学で開かれることが予定されている。そして第四回は来年再び日本で開催することとなる。皆様のご支援とアドバイスを得て、日中韓のユース・フォーラムが更なる発展を遂げて行くことを心から祈念したい。



参加者全員で記念撮影